

『割印帳』記載の医学書

木場由衣登

日本鍼灸研究会

享保7年(1722)年より江戸幕府は、出版物の内容を統制し、海賊版の流通を禁止する為、出版事情を改正した。このとき、新たに書籍を開版販売するには許可が必要となり、その許可を記した幕府の記録簿が『割印帳』である。本書は東京国立博物館に写本(表紙の外題には『割印帳覆本』、後、東博本と略)が存在し、この東博本が最善本である。岩瀬文庫、上野図書館、静嘉堂文庫に存在するのは、東博の転写本である。昭和37年に朝倉治彦・大和博幸が東博本を翻刻した『享保以後江戸出版目録』(臨川書店刊)が存在しており、今回の調査には平成5年(1993)に刊行された『享保以後江戸出版目録』の新訂版を用いた。現存する『割印帳』は本来あった享保7年より享保11年までを欠き、享保12年(1727)から文化12年(1815)までの89年間における出版状況を記録している。そして、江戸中期といえは医学史的には後世方と流派鍼灸の衰退、古方派の隆盛があった時代であり、出版物にもこの時代の風潮が観察されるはずである。今回は、『割印帳』に記載されている医学書(養生、獣医の関係書を含む)について調査し、さらに鍼灸書についても言及したい。

『割印帳』に記載される書目数は全体で7639種であり、この内、医書は440種あり、全体の6%である。医書の登録数を元号毎に集計すると、享保期は全697種中、この内、医書は38種あり、以下、元文期は7種(全229種中)、寛延期は2種(全370種中)、宝暦期は95種(全1334種中)、明和期は40種(全895種中)、安永期は65種(全893種中)、天明期は13種(全489種中)、寛政期は75種(全1160種中)、享和期は25種(全369種中)、文化期は80種(全1203種中)の医書が記載される。登録される医書の中でも特に目立ったものとして、『傷寒論』の注解、もしくは書名に「傷寒」を含む書が多く見られ、その登録数は40種あり、古方に系統する医書も多い。和刻漢籍に相当するものは、『難経』『千金方』『千金翼方』『十四経發揮』などがあり、張介賓の書も多く見られた。他にも「痘疹」に関する書も多く、『痘疹経験要方』『痘科鍵』『痘疹金鏡録』『湯液痘疹良法』『種痘心法』『痘科鍵』『幼科種痘方』『痘疹結要』『痘瘡医筌』『痘疹救送方』『痘疹大成集覧』『種痘必須弁』『痘疹戒艸』などの計16種の登録がある。「麻疹」に関する書は12種あり、『麻疹気作録』『麻疹方薬』『麻疹良方』『鼈頭麻疹精要』『麻疹備考』などが登録されている。

鍼灸書に関する登録は、『癰疽神秘灸経』『艾灸通説』『針灸則』『針法弁惑』『針灸拔粹』『針灸便覧』『水腫刺鍼法』『鍼灸説約』『馬療針灸撮要』(計9種)があり、経穴書としては『愈穴弁解』『穴名備考』『按穴捷経』『腧穴折衷』『腧穴便覧』『経験要穴』『腧穴捷経』『経穴彙解』『経穴纂要』『経穴示蒙』『愈穴弁解』(計11種)、経絡・銅人に関するものは、『十四経發揮』『銅人経絡筌』『非十四経』『非々十四経』『銅人形引経訣』『新校正十四経』『仮名読十四経』『正誤箋注十四経發揮』『仮名読十四経治法』(計11種、この内『十四経發揮』は3種)がある。これらを合計すると31種である。江戸前期に成立が確認される流派的な鍼書や灸書の登録は少ない。『内経』に関する書は『徂徠素問評』のみであり、『靈枢』(『鍼経』)の和刻本、注解本はない。『難経』については、『難经文句』『難経口問口伝抄』『難経達言』『難経発微小言』『難経経釈』『難経』の計7種が登録される。鍼灸の書として、経脈書、『内経』、『難経』の書を含めるとすれば、医学書の約9%が鍼灸書である。

『割印帳』に登録されているだけでは、それぞれの書が如何ほど刊行されているかは不明瞭であるが、書名や再版の回数だけでもこの時代の特徴は現れているようである。